

新たな農林業の姿を目指す 生態調和農学機構



山手線高田馬場駅から西武新宿線急行に乗り20分ほどの田無駅で下車、北口に広がる商店街を10分ほど歩いて抜けるとそこに附属生態調和農学機構（以下、機構）がある。正門を過ぎると、突然、都会の喧噪とはまったく隔絶された空間が目の前に広がる。その前身は昭和10年に設置された東京帝国大学農学部附属多摩農場に遡るが、その後田無農場となり、現在の機構は、平成22年には千葉市検見川にあった旧緑地植物実験所と統合され、さらに、現在の田無演習林の教育研究機能を組み入れて誕生した。機構では、耕地・緑地・林地からなるフィールドにおいて、持続的な生態系サービスと調和する農林業と社会のあり方の解明を目指した教育・研究が進められている。

90年近い歴史を有する機構であるが、平成25年から始まったキャンパス整備とともに年々急速に姿を変えつつある。昨年秋には格納庫・調製施設群が完成した。さまざまな農業機械を収納する格納庫は、手動で簡単に開閉できる大型シャッターや太陽光を集光した庫内照明など優れた機能性



を兼ね備えている。また、昨年春には国際フィールドフェノミクス研究拠点が設置され、農業への情報通信技術の活用を加速している。上の写



真は国内有数の花ハス遺伝資源の保存圃場をドローンで撮影したものであるが、鳥の目でとらえた情報を育種や栽培分野に活用する研究が進められている。都内では珍しい水田圃場では、急激に進む気候温暖化に対応するために、早朝に開花できるイネの研究も進められている。機構では農学部の学生を対象とした多くの農場実習が実施



されている。応用生物学専修ではキクの育種に関する実習が行われ、毎年秋には数千のさまざまなキクの実生が花を咲かせる。農学の教育・研究において新たな花を咲かせる機構の活動にご期待ください。

大学院農学生命科学研究科附属生態調和農学機構長

柴田道夫 教授